

ネット集団自殺のリアリティ

- 後期近代社会の人間関係を反照する病理形態 -

- . ネット集団自殺の理解困難性..... 1
- . 「現実の強度」に対する憧憬..... 2
- . 「純粋な関係」への過剰期待..... 7
- . 虚構による現実のレイヤー化.....14

土井隆義（筑波大学）

「もしかしてもうあたしはすでに死んでてもそれを知らずに生きてんのかなあと思った」

岡崎京子『リバーズ・エッジ』

. ネット集団自殺の理解困難性

-a ネット集団自殺の死者数

厚生労働省の発表によれば、ネット集団自殺による死者数は、2003年が34人、2004年が55人、2005年が91人となっている。2005年の自殺者の総計は32,552人であるから、ネット集団自殺による死者数を多いとみるか少ないとみるかは、論者によって判断の分かれるところであろう。

とりあえずここでは、佐伯啓思[1999]による次の言葉を引用しておきたい。「自殺のような決意した死には、いわば『形』と『意味』がやはり必要だと思う。だが、この『形』と『意味』がほとんど失われてしまっている.....自殺率の増加そのものというよりも、その『形』のなさこそが今日の病理を示しているように見える」。ちなみに、20～30代の死因の第一位は、2002年以来ずっと連続して自殺である。

-b 動機と過程における特徴

ネット集団自殺における「形」のなさについては、その特徴を2つの側面から考えることができよう。第一は、とりたてて生活の困難を抱えているわけでもないのに自殺するのは何故なのかという動機をめぐる不可解さである。たとえば、ある自殺未遂者は「思えば、本当に死にたかったわけじゃない。ただ、生きることを休みたかった。死んでも死ななくても、どっちでもよかった」と語る（「死に至る罅」『AERA』2003年8月18-25日号:10）。ここには、死を決意するという強い意思が不在である。

この点について、香山リカは、「死ぬか死なないかは『くじ引き』みたいなもの。一線を越えるという覚悟はもちろん、死ぬ理由と言えるほどのものもない。ノリや気分やタイミングがあれば、という感じ。どうしても死

にたいという絶望にさえ達していない」と語っている（「死に至る訳」『AERA』2003年8月18-25日号:10）。

ネット集団自殺における「形」のなさをめぐる第二の特徴は、ネットで募った赤の他人と一緒に自殺しようとするのは何故なのかという過程をめぐる不可解さである。ネット上で仲間を募ることで、無関係のように見える他者との偶発的な共同によって、自死の決行にまで導かれてしまう。

この点について、池田清彦[2003]は、「自殺というこれ以上はないというネガティブな個人的決断に、つい先日まで見ず知らず赤の他人が相乗りして、さしたる悲愴感もなくゲームでもやるかのように、あっけなく死んでしまう……趣味を同じくするといったポジティブな事情であれば話は分かる。赤の他人と心中するというのは私にはどうにも理解できないのだ。心中というのは、個人的事情を同じくする人々（夫婦とか家族とか）が、精神的に追いつめられてするものだ、というのが私を含めた世間の常識ではあるまいか」と述べる。

-c 2つの不可解さの同根性

ネット集団自殺は、形式的には心中のように見えるが、しかしその実態は異なっている。そこには互いの感情の絡みがまったく見受けられず、その出会いも、たまたまメッセージが目に残ったという偶然性がきわめて高い。そのメッセージ自体も、「自殺仲間の募集」という形式的なものであり、自殺を志願するに至った理由や各自が抱えている諸事情についての書き込みではない。さらには、自殺仲間となった後も、互いのやりとりの中身はその決行手段をめぐるものがほとんどで、そこに感情的な交流はほとんど成立していない。

こうしてみると、ネットで自殺仲間を募るという形式の不可解さは、そこに成立する人間関係の形式性を媒介に、強い動機の不在という特徴とも密接に関わっているのではないかと推察される。すなわち、動機の不可解さと過程の不可解さとは、じつは同根の現象なのではなからうか。ネット集団自殺の未遂に終わったある20歳の女性は、「漠然と、でも本気で死にたいと思いつけてきた」と語っている（「ネットの死・上」『朝日新聞』2003年5月14日朝刊）。ここには、価値の序列性を失った現代社会に広まっている「強い動機を持たない切実なる行為」（切通理作）の極北を見出すことができるように思われる。

・「現実の強度」に対する憧憬

-1 「現実らしさ」の希薄化した現実世界

-1-a 希薄な生のリアリティ

「今の時代、生きること自体そんなに難しくない。どんなバイトをしても生きていける。でも生きてるだけじゃ、別に生きなくても同じじゃないかと。死にたいというより、生きたくない気持ちでした」。ネット集団自殺のある未遂者はこう語る（「追跡ネット自殺1」『毎日新聞』2003年8月27日朝刊）。また、薬物の大量服用による自殺未遂を2度起こした私の知人も、「何かに生きづらいというよりも、生きている感じがまったく得られなくなり、リストカットをして血を見ることで落ち着いたりしていた」と語っている。

このようなメンタリティの特徴について、斎藤環[2003]は、「生きる感覚が希薄な若者が多いことです。特に引きこもりの若者たちの場合、自分で自分をからっぽだと表現することが多い。生きていてもしょうがない人間であると感じている。そういう、死に近い若者が潜在的にたくさんいます」と述べる。また、芹沢俊介[2003]も、「おそらく若い自殺志願者たちの共通にかかえる苦悩があるとすれば、この世に生まれたことに意味を見いだせないことではないか」と述べている。

いま現在、生きづらくて仕方なく、もう死んでしまいたい、そして何とか苦しみから逃れたい、それほど切羽詰まった様子を、ここからうかがい知ることはできない。この瞬間にどうしても死ななくてはならないというほ

どの緊急性は見受けられない。だから、彼らの死への衝動には強い動機づけを見出すことができず、あたかもロシアン・ルーレットのように虚無的な振る舞いとして立ち現われてくるのではなからうか。

-1-b 社会的原因と個別動機

ここで思い起こされるのは、自殺の理由を「唯ぼんやりした不安」と述べた芥川龍之介の言葉である。彼は、『或旧友へ送る手記』のなかで、「君は新聞の三面記事などに生活苦とか、病苦とか、或は又精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を発見するであらう。しかし僕の経験によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示しているだけである」とも述べている。

また、大澤真幸[1996:189]は、生活に不自由のない若者がオウム真理教へ入信した背景に、「生の名状し難い空虚」があると推察し、「生のどこにもめりはりのきいた不幸や苦難がないということ、つまり（理想状態に対する）「欠如」がどこにもないということ、このことが、オウムへと参加する選択を規定している」と解説している。このようなメンタリティには、彼自身も指摘するように現代の自殺志願者と通底する部分がある。

しかし、かつてE・デュルケームが『自殺論』で喝破したように、自殺の背後に潜むこのような社会的原因が、個別具体的な自殺動機として語られることはむしろ稀である。この点について、大澤[1996:189]も、「問題なのは、生の内部に散りばめられた個々の事情ではなく、生を全体として粹づける時間的な特性なのだ。しかし、このような特性は、生そのものの前提なので、誰にとっても、対自化することは非常に難しい。それゆえ、しばしば、信者は、入信動機を説明せざるをえないとき、最後の決心のきっかけになったに過ぎない瑣末な事情を、『理由（口実）』として申し立てることになる」と指摘している。

-1-c 相反する語り口の含意

2003年に埼玉県で男女7人が集団自殺をした事件で、ネット上で仲間を募る中心的な役回りを果たした女性は、「7～8人で死ねたら、新しいよね」という言葉を残している。同様に、ネット集団自殺の志願者たちには、「新聞に載りたい」「どうせ死ぬのなら、大げさに取り上げてもらいたい」といった自己顕示欲をみせる人びとが多い。また、その一方では、「消えるように死にたい」「最初から存在しなかったことにしたい」といった自己消去願望を逆に述べる人びとも多い。

しかし、以上のような観点に立てば、相反しているように見えるこれらの言葉の裏にも、じつは共通のメンタリティが潜んでいることに気づく。おそらく「消えてしまいたい」という言葉は、ろうそくの灯火のような現実の生に対するリアリティの薄さの反映なのであろう。ふっと息を吹き掛ければ消えてしまうような、そんな希薄な生の感触しかないから、それを消すためにも大きなエネルギーを必要としないのではなからうか。

他方で、自殺の事実をマスメディア等で大々的に取り上げられることを期待する語りには、一見すると逆のメンタリティが潜んでいるように思われる。しかし、現実の生に対するリアリティの希薄さに対する反動としてその願望を捉えるならば、じつは自己消去願望と通底している側面も見えてくる。表現される言葉としては相反する両者の語りにも、死への飛翔という強い決意を感じさせないという点で似通った側面が見受けられるのは、現実の生に対するリアリティの希薄さが、死へと踏み出す意識を希薄化しているという共通の背景をもっているからであろう。

ちなみに、15歳から19歳までの100人に対して、2003年に『AERA』が行なった調査（「死に至る訳」『AERA』2003年8月18-25日号:12-3）でも、「死のうと思ったきっかけ」を問うた質問に対し、けっして多数派ではないものの、「ただなんとなく、つまらないなあってとき」「なにをやってもつまらなく、うまくいかなかったとき」「自分がよくわからなかったりすることがあるとき」「生きるのがだるい」といった回答が少なからず見受けられる。生に対するリアリティの希薄さを感じさせるこのような声の存在を見過ごすべきではなからう。

-2 リアリティ強化のための脱社会的装置

-2-a 脱社会的な純愛ブーム

昨今の物語市場は純愛ブームに沸いており、若者向けの出版物においてもその傾向は顕著である。『世界の中で、愛をさげふ』や『Deep Love』などが書店の売り場を席巻したのもその表われの一つといえよう。とくに後者の『Deep Love』は、当初は携帯電話向けのウェブ・サイトで配信された経緯もあって、高年齢層にはほとんど浸透しなかった。それにもかかわらず、高校生を中心とした読者層のみを対象として爆発的な売り上げを記録している。

このような物語消費の傾向は、純愛ブームと一口にいっても、じつはそれぞれの世代で異なるメンタリティに支えられた現象であることを示唆している。じっさい、高年齢層に受けている作品ではプラトニックな恋愛が中心に描かれているが、若者向けの作品ではセックスの描写も決してタブーではない。おなじ純愛物語でありながら、この落差は大きい。

往年の純愛物語の多くは、社会的な差別や親の無理解といった周囲との軋轢をバネにして、主人公たちの恋愛が純化されていくという構図をとっていた。二人のあいだを阻む社会的な障壁を打ちくたせようと努力するなかで、あるいはその障害からの逃避行を延々と続けるなかで、たがいを想う気持ちは高められていった。どちらの場合も、社会という対立項との葛藤の存在が、純愛を成立させるための必須条件であった。

しかし、現在の若者に支持される純愛物語の多くは、社会に対する反逆を基調とした反社会的(antisocial)なストーリーでもなければ、社会からの逃避を基調とした非社会的(asocial)なそれでもない。そこでは、脱社会的(desocial)なストーリーが展開されていく。二人の対立項としての社会はほとんど描かれぬ。主人公たちは、周囲との葛藤をほとんど経験することなく、最初から二人だけの世界を生きている。にもかかわらず、彼らの恋愛が純化されるのは、そこに死という生物学的な障壁が立ちあがるからである。

もちろん、死を媒介に恋愛を純化させる物語は、過去の作品にも多々見受けられる。たとえば掘辰雄の『風立ちぬ』も、実録物の『愛と死を見つめて』もそうであろう。その意味では、若者に受けている現在の純愛物語も古典的な物語作法に従ったものといえる。しかし、かつての作品には、リアリティを感じさせる社会と、したがってその重圧感も背景として同時に描かれていた。それに対して、出版される作品のほとんどが脱社会的であり、それがまた一様にヒットしているという現在の状況は、やはり現実世界のリアリティの希薄さという今日の特徴を反映した現象とみるべきであろう。

-2-b 死を着るゴスロリ少女

生のリアリティを補強する装置として死のイメージを用いる傾向は、近年の若者のファッションにも見受けられる。ファッションは、社会的な言語で表現される物語のように意味の理解を媒介とせず、内発的な感覚や感性をそのまま表現できるメディアであるため、その傾向はむしろ顕著であり、表現も直截的だとすらいえる。

ゴシックロリータ(ゴスロリ)と呼ばれる少女たちに人気のファッションは、彼女たち自身の表現を借りるなら、「退廃的な黒」を基調としたものである。彼女たちは、白い肌に目の周りを黒く塗り、まるで死人のような風貌を好む。また、十字架や骸骨や血を装飾に用いることで、死のイメージを積極的に演出する。女性のファッションには異性からのまなざしを意識した社会的な色彩の強いものが多いが、ゴスロリのファッションは自らのまなざしの内部で閉じきっており、その意味ではきわめて脱社会的である。それは、いうなれば「性」ではなく「生」に対する憧憬が反転して具現化されたものである。

ゴスロリ少女には、暗い内容の歌詞を特徴とするヴィジュアル系バンドの熱狂的なファンも多い。たとえば、その一つであるムックは、「遺言」という曲で、「もし僕が眠っても 教室の机に花は 置かないでください 悲しさの演出はいらぬから この世界が 僕らを創り出して この世界に 僕らは殺された」と歌う。ファンの少女たちは、これらの歌詞に共感し、自らの代弁者という感覚をそこに得ているようである。

あるゴスロリ少女は、「わたし、30歳になったら、自殺するって決めてるんです。あっ、別に言ってるだけで、変に心配とかしないでくださいね」と明るく語る。彼女にとっては、「死の予定」もまた自らのファッションを構成する要素の一部なのだろう。それは、いわば虚構化された「死」でありながら、しかし絶対性や純粋性を感じさせてくれる装置である。すなわち、彼女たちが死のイメージに惹かれるのは、逆説的ながら、おそらくそこに生のリアリティを増幅させる機能を見出しているからであろう。

-2-c 自殺を準備する高揚感

このように眺めてくると、自殺の決行へと向けた具体的な準備作業は、物語やファッションとは桁違いの強度で生のリアリティを強化してくれるにちがいない。それは、物語やファッションとは比べものにならないほど身近に迫ったものとして死を感じさせる行為だからである。その最後の瞬間へと向けた高揚感のなかで、生の輝きも倍増していくかのように感受されているのではなかろうか。

とりわけ、他者との共同による死への準備作業は、その限られた最後の時間に揺るぎない客観性と濃密性を与えてくれることだろう。たとえば不治の病がそうであるように、いわば拘束力をもった外在的な事実として、自分に迫ってくるものであるかのように死を捉えることができるからである。集団自殺の計画が途中で頓挫したある女性は、「メールのやりとりで死を考えることは、絶望から抜け出して生きることを考えることにもなっています。だから『死にたい』って思ってもいいというふうに自分のなかではしていきたい」と語っている（渋井哲也[2004:43]より重引）。

このように、死が間近に迫ったものであればあるほど、皮肉なことに生のリアリティもまたその重さを増していく。だから、その決行の瞬間を永遠に先延ばしにすることはできない。「いつか実行しよう」では、死の魅力は半減してしまう。たとえば、『完全自殺マニュアル』を読み、自殺の方法を具体的に検討することで、多少は生の輝きを取り戻すこともできるかもしれないが、その効力はけっして長続きしない。最後の瞬間の訪れが遠ければ遠いほど、それだけ準備期間の超越的な地位も損なわれてしまうからである。死の瞬間は、じゅうぶんに近接した未来に、しかも確定された期日に設定されていなければならないのである。

-3 生のリアリティの希求という潜在動機

-3-a 価値項目の序列の崩壊

死は、私たちの意思の効力が及ばない領域にあり、しかも誰にとっても不可避なものであるため、もともと純粋性や絶対性といった色彩を帯びやすい性質をもっている。しかし、とりわけ今日においては、その色彩が過度に強調され、しかも人びとを惹きつける憧憬の対象とすらなっている。物語市場における純愛ブームやゴスロリ・ファッションといった虚構としての死にかぎらず、ネット集団自殺というリアルな死もまたその渦中にあるといえる。

死を媒介とした純粋性や絶対性に対する人びとの憧憬が高まっているのは、それだけ生の領域において虚偽性と相対性を感じる度合が高まっていることの反照であろう。今日の日本では、生活に必要なものはとりあえず何でも容易に入手できる。豊かな社会の到来とともに、目標達成の困難は大幅に減少した。逆に、何でもそろっているがゆえに、生活上どうしても欲しいものはなくなってしまった。私たちは、ある対象を渴望する度合いが大きければ大きいほど、その価値を絶対的なものとみなす。すなわち、入手の困難性は、価値を増大させる。しかし、現代は、欲望の充足を妨げる障害が、少なくとも日常生活の上ではほとんど存在しないため、さまざまな対象の価値は大幅に低下している。

さらに、目標までの距離が縮まったのに加えて、選択しうる目標の幅も広がっている。望むものは何でも容易に入手できるという状況、すなわち選択しうる価値目録の項目数の増加は、互いの価値を相対的に低めあうことになる。たとえ選択肢のあいだに序列がついていないとしても、いや、むしろ序列がついていないがゆえに、あ

らゆる項目の価値は等しく逡減されていく。ひとは、同じように魅力的な選択肢がほかにも数多く残されているとなれば、特定の選択肢にだけ固執することはなくなるからである。他の選択肢の可能性もつねに残されているという状況は、自らが選択した価値を相対化してしまうのである。

今日では、価値項目の序列性が薄まってあらゆる選択肢が等価なものに映り、しかもその選択肢の数も過剰なほど多く用意されているかのように感受されている。このような後期近代社会において、ある価値項目を選択することの魅力は、自ずと逡減していく。また、たとえどんな項目を選択したとしても、それは「本物ではない」という虚偽の意識がいつまでも付きまとう。こうして、可能性をいまから切り開いていくのではなく、すでに開かれていると感じられることによって、現実世界のリアリティは大幅に減退してきた。豊かな社会は、必ずしも価値の絶対量の増大を意味しない。選択項目の数の増加は、価値の細分化と相対化をもたらしたのである。

-3-b 否定による生の意味化

私たちは、どの価値項目に対しても圧倒的なリアリティを感じるができなくなっている。しかし、それは、選んだ価値項目の中身に固有の魅力がないからではない。あり余る選択肢の存在が、個々の項目の魅力を逡減させている。したがって、価値項目の中身に手を加えて改良したり、より魅力的な選択肢を新たに設定したりすることで解決される問題ではない。いずれかの価値項目を選択するという行為それ自体が、別の価値項目の潜在的な可能性とその魅力を浮き上がらせてしまっている。このとき、絶対のリアリティを獲得する唯一の方法は、価値項目を選択するという行為それ自体を否定してしまうことであろう。

大澤[1996:185]によれば、価値項目のどんな選択も相対化されてしまう現代社会において、超越性の権能を回復する実効的な方法は、あらゆる項目を全否定してしまう「絶対的な否定」だけである。すなわち、「世界の全的な否定を理想として設定した場合にのみ、その否定の営みの反作用として、消耗されることのない超越性が、かろうじて回帰してくる。積極的＝建設的な理想は、より一般的な理想の中で相対化されるのを、避けることができない」からである。

どのような内容の理想も積極的な対抗策となりえないとき、それらの理想が排除し、否定せざるをえないことのみを内容とするような理想を設定することだけが、生の意味の空洞化に対抗する手段となりうる。大澤によれば、オウム真理教が最終戦争で目指したのもこの目論みの一例であり、現実世界の全的な否定、現実世界そのものの殺害であった。

また、大澤[1996:191-2]は、「世界に対峙する自分自身をまったく何の目的もなく殺害してしまうということは、世界そのものを否定することに対する(いくぶん矮小化された)機能的代替物になりうる」とも述べる。「自らの死の迫真的な現実性は、最終戦争がもっていたのと同じように、超越性を措定する機能をもっている」。なぜなら、「死という否定性を生々しく具体的な現実として想定することが、生そのものを有意味化する超越性を可能にしている」からである。

-3-c 現実回帰としての自殺

そうしてみると、あくまで逆説的ながら、生のリアリティを希求する手段としての自殺は、現実回避の試みというよりも、むしろ現実回帰の試みといえるのではなからうか。ふたたび大澤[2005:102]の表現を借りるなら、それは、現実からの逃避ではなく、現実への逃避である。「『現実』へと、通常の現実以上に現実的なものへと、現実の中の現実へと、極度に暴力的な現実へと逃避している、と解したくなるような現象」の一部として、ネット集団自殺も企図されているのである。

どんな価値項目を選択しても相対化され、どんな内容にコミットしても虚偽意識に苛まれてしまう現実のリアリティ不足に慢性的に直面しているとき、その日常性の膜を突き破って、「現実の中の現実」に少しでも近づこうとすれば、その試みは、この現実を全否定するような極度に暴力的な形式とならざるをえない。たとえば、自らの意思では制御不可能な、しかし自らの存在のあり方を全規定してしまう超越的な現実として語られるトラウ

マ経験が、きわめて暴力的な様相を伴っているのもそのためであろう。

トラウマの経験は、その存在を全否定してしまいたくなるような、きわめてネガティブな現実のはずである。しかし、だからこそ、それは超越的な権能を発揮することができ、自らのアイデンティティの全面的な規定要因として機能しうる。ここに、究極のネガティブな現実であるはずのトラウマを、きわめてポジティブに希求するというきわめて現代的なメンタリティが生じることになる。近年、自らのトラウマ経験をむしろ積極的に語ることで、それを自らのアイデンティティの核にしようとする若者が目立つようになっているのはそのためであろう。このような人びとにとっては、自らの人生にトラウマ経験のないことこそがトラウマとなっている。

トラウマの経験を措定できる人びとは、そのことで生のリアリティを増幅させることができる。自分ではいかんともしがたい生きづらさの根源をそこに求めることで、現在の生の意味を少しでも確定することができる。しかし、それさえも措定できないほど希薄なリアリティの世界を生きている人びとは、すなわち、過去に生じた「極度に暴力的な現実」へと逃避できない人びとは、やむなく近未来にその代替たる「極度に暴力的な現実」を求めざるをえないであろう。では、その試みの一つとして、これまで論じてきたような自殺の企図が存在するのだとしたら、ネット上で仲間を募るといった具体的な形式がそこで採用されるのは何故だろうか。

・「純粋な関係」への過剰期待

-1 アイロニカルな没入による純粋な関係

-1-a 形式性に依拠した虚構

「ネットは現実と違い、考えが合う人だけを選んでやりとりができる。自殺を肯定する人たちが集まってしまった」。ネット集団自殺のある未遂者はこう語る（「追跡ネット自殺2」『毎日新聞』2003年8月28日朝刊）。しかし、ここで語られている「考え」の合致とは、「自殺を肯定する」というその一点についてだけの合致である。それ以上の実質的な中身は、たとえば自殺を志願するに至った動機や、その苦悩の中身についての「考え」の合致ではない。

このような様相について、芹沢[2003]は、「かわりからみた場合、幫助の意味はここでは、単に体としていっしょにいるだけということまで拡張されている。こうした事態は、自殺志願者の側に身を置いてみると、相互のかわりを最小限にしたいという気持ちの表れとしてとらえなおすことができよう。お互いが他人のまま、それぞれが単独者として死へ赴きたい、そのように彼らが考えていることが伝わってくる。各自は死ぬ動機も別々なら、死んでから行く場所もまた別々なのだ」と解釈する。

たしかに、集団自殺を企てる人びとがネット上で交わす話題は、そのほとんどが自殺を執行する方法についてのものであり、互いの内面に立ち込んだ会話はあまり見受けられないし、むしろそれを避ける傾向さえうかがえる。その様相だけから判断すれば、彼らの人間関係はまったく希薄で、互いに孤立しているようにも見える。しかし、一見したところ希薄に見えるその関係の裏では、じつはある独特のリアリティが求められているのではなかろうか。

ネット集団自殺を企てる仲間は、「自殺を肯定する」という一点のみを絆として築かれた関係である。しかし、死という絶対で純粋な接点のみでつながっているからこそ、彼らが「純粋な関係」と主観しうるようなリアリティがそこに成立するのではないか。互いの内面的な問題について彼らがあまり触れたがらないのは、それに伴ってさまざまな社会的ノイズが侵入してくることを回避し、互いの関係における純粋さのリアリティを保つためであるように思われる。

いうまでもなく、コミュニケーション・メディアとしてのネットは、相手とのかかわりの接点を特定の一点に

だけ絞り込むのに都合のよい装置である。すなわち、本音を互いに理解しあえる理想的な関係がネット上には成立しやすいから、自殺衝動を共有する仲間もそこで集められるというよりは、自殺衝動という純粋な感覚だけを共有する形式性がネット上では維持されやすいから、理想的な関係がそこに成立しているかのように感受されるのである。

-1-b 虚構を現実化する他者

ネット集団自殺を企てる人びとが、ネット上の人間関係に純粋なリアリティを見出すのは、けっしてヴァーチャルな世界を現実の世界と混同しているからではない。そうではなくて、情報量とその質の操作が容易なヴァーチャルな世界では、現実の世界よりも「純粋な関係」の形式性が担保されやすいからである。いわば、その形式を支えてくれる他者をヴァーチャルに指定することで、純粋さのリアリティが確保されているのである。

しかし、虚構を現実として振る舞えるのは、ネット端末の向こう側にあくまで生身の他者がいるからである。だから、それが虚構の関係であることを知りながら、あたかもリアルな関係であるかのように振る舞うことができる。大澤[1996:219-20]が指摘するように、「人が虚構に準拠して行為するのは、その当人が、問題の虚構を（現実と）信じているからではない。そうではなくて、その虚構を現実として認知しているような他者の存在を想定することができるからなのである。……人々の行為を規定しているのは、何を信じているかではなくて、何を信じている他者を想定しているかである」。生身の相手を必要とするこのような事情は、向こう側にいる他者にとっても同じであるから、ここに共依存的な関係が成立することになる。

ただし、その生身の他者が「純粋な関係」の形式性を支えてくれるためには、それは同時にヴァーチャルな他者でもなくてはならない。すなわち、個別具体的な意味を孕まない不特定の他者、いわばシニフィエを欠いたシニフィアンとしてだけの他者でなければ、前節で指摘したようにたちまち相対化の対象とされてしまい、したがってその関係性にも虚偽の意識が生まれてしまう。それが超越的で「純粋な関係」でありうるためには、相手は完全に中身の空白な他者でなければならない。このように主観的な意識と客観的な行動との間に生ずる独特の逆立関係を、大澤[2006:150-1]は「アイロニカルな没入」と呼ぶ。したがって、「アイロニカルな没入」は、実際に経験できる世界の外部に、抽象的な他者の存在を指定できるときに初めて生起しうる現象である。

大澤の巧みな例示を借りるなら、たとえばテレビのバラエティ・ショーでは、しばしば「スタジオの観客」も画面に映し出される。なぜなら、仕事で疲れ切っているなど様々な事情で今ひとつ番組に没入できない視聴者に代わって、ショーの観覧を盛り上げてくれる存在だからである。スタジオで盛り上がっている彼らの姿をつうじて、その画面を見つめている視聴者の側もまたそのショーを楽しんだことになる。ここには、ある種の民族が有する「泣き女」と同じ機能があるという。「泣き女」は葬式に参加し、他の参列者の代わりに泣き悲しんでくれる。そのことによって、葬式の手配などで忙しく立ち動き、実際には泣く暇さえなかった参列者たちも泣いたことになるのである。

ここで留意すべきなのは、「スタジオの観客」と視聴者の間には、そして「泣き女」と葬式の参列者との間にも、なんら実質的な交流はないという点である。もし、そこに交流の回路が成立してしまえば、とたんに両者の関係の形式性は破壊されてしまう。スタジオの観客は、あくまで笑っているように見えていることが重要なのであって、本気で笑っているか否かは問題ではない。むしろ、そこに実質的な交流が生じた結果、それが単に笑っているフリにすぎないことがあからさまになってしまうと、「アイロニカルな没入」は成立しなくなってしまう。「泣き女」にしても、ただ泣いている姿のみが必要なのであって、なぜ泣いているかがそこで問われては元も子もない。

すでに明らかなように、ネット上で募られる自殺仲間は、「スタジオの観客」や「泣き女」と同じ機能を果たしている。あたかも「純粋な関係」が成立しているかのように振る舞う他者の存在が、あたかも「純粋な関係」が成立しているかのように自分自身も振る舞うことを可能にする。その結果、自死の絶対的な純粋さも極められていく。したがって、その関係の純粋さを相手がどこまで確信しているかは問題ではないし、それを確認しあえ

るような実質的な内容をともなった絆も必要ない。むしろ、そのような絆が形成されてしまうと、ヴァーチャルに構築された「純粋な関係」の形式性は逆に損なわれてしまう。だから、情報の量と質の操作が容易なネット上で仲間を探す必要が出てくる。その仲間は、特定の他者として特定の意味を孕んではならないからである。

-1-c 虚構を経由して現実へ

ネット集団自殺では、一緒に死へと向かう仲間がいるという事実だけが、「純粋な関係」の形式をヴァーチャルに担保してくれる。そこで求められる仲間は、具体的に何を考え、なぜ死にたいのか、その個々の事情に共感でき、その理由に共鳴できる他者ではない。自殺を志願するに至った背景が問われることで、互いの関係に社会的ノイズが入ってしまうと、現実世界の他者となんら変わらなくなってしまう。それでは、互いの関係の内実を具体的に問わざるをえなくなる。

このように、まず個別具体的な他者が存在し、その他者との間に「純粋な関係」が築かれるのではなく、まず「純粋な関係」への希求が存在し、その観念のなかにヴァーチャルに他者が当てはめられる。それが、ネット集団自殺の特徴である。従来的心中では、特定の他者との永続的な関係がまず希求され、その思いが心中行為に純粋さの色彩を与えてきた。それに対し、ネット集団自殺では、まず純粋さへの希求が当事者の側に先在し、その思いを満たす手段として他者が求められる。だから、その相手は無色透明な存在でなければならない。いわば自分の分身のようなものだからである。

このような様相の特徴を評して、斎藤[2003]は、「(従来的心中にしばしば見られる)『物語性』がないことです。至上の愛のためとか、相手との究極の同一化などといった動機が感じられません。あくまでも想像ですが、彼らはお互いの背景とか生活史を知らないまま死んでいったのではないのでしょうか。年齢もばらばらだし、動機が同じとは考えにくい。男女の組み合わせでも、それがエロスなのかといえば、違う。安全に死なせてくれる仲間だったのでは」と語っている。

ネット上に構築された「純粋な関係」は、所詮はヴァーチャルなものであるから、いずれは現実世界との間で破綻を免れない宿命にある。ところが、互いの自死を前提とした関係では、現実世界の生そのものが完全消去の対象である。そのため、集団自殺の決行前に何らかの不都合が生じた場合、いとも容易くその集団を解消し、別の関係へと乗り換えることができる一方で、ヴァーチャルなはずの理想的な関係が永遠に保たれ、その純粋さが貫徹されるかのように錯覚することもできる。その意味で、ネット集団自殺とは、究極の虚構を経由することによって虚構化した現実世界を全否定し、そのことによって「現実の中の現実」へと接近しようとする試みだといえる。

ところで、第 節での考察によれば、現実世界におけるリアリティの希薄さの根源は、後期近代社会に特有の価値項目の相対化とそれに伴う魅力の減退にあった。しかし、そのリアリティを逆説的に回復する手段として、単独自殺ではなく集団自殺が選択され、しかもその試みにおいて「純粋な関係」の希求がきわめて重視されているという事実は、生のリアリティの希薄さの根拠が、日常のレベルではその「純粋な関係」の対極に当たるものとして具現化されているということ、すなわち人間関係の虚偽性として感受されているということを示唆している。だから、「現実の中の現実」へと接近するために、「純粋な関係」という虚構をあえて経由する必要があるからである。

-2 現実世界を虚構化する「優しい関係」

-2-a 多元化の進む人間関係

今日の日本では、既成の価値項目の序列性がほとんど崩壊し、どんな選択内容も他の選択肢の可能性によってたちまち相対化されてしまう状況にある。人びとがこのリアリティの欠如に直面するのは、日常生活のなかでは人間関係においてであることが多い。価値の相対性がとりわけ切実な問題として迫ってくるのは、それが人間関

係の葛藤となって立ち現われる場合だからである。ある関係のなかで選択された価値項目は、その関係のなかにおいてのみ有効なものとして肯定され、別の関係へと移行したとたんに否定され無効化されてしまう。個々の関係性をまたいで受容されうるような超越的な価値序列のコンセンサスが、もはや全体社会には成立しづらくなっているからである。

しかも、後期近代社会においては、このような相対化の発生する契機となるような人間関係の多元化も急速に進んでいる。その傾向は、とりわけ若年層において著しい。浅野智彦ら[2006]の調査によれば、この10年間で若者たちの人間関係は急速に多元化している。また、そのような状況への適応として、辻大介[1999]が指摘するように、その時々相手に合わせて呈示される自己像を巧みに切り替えていくフリッピング志向的なメンタリティも同時に広まっている。

かつて、山崎正和[1987]は、前期近代と後期近代の狭間の時代に、特定集団に埋没した人間関係とその規準に拘束された「剛直な個人」に替わって、複数の集団間を自在に渡り歩きつつ多様な人間関係を同時に享受しうる「柔らかな個人」が誕生しつつあると説いた。そして、そのような「社交する人間」を、来るべき社会の主人公として楽観的に描いた。しかし現実には、複雑に絡み合い反発しあう多元的な人間関係をじゅうぶんに謳歌できるほど、私たちのメンタリティは現代社会に適応しきれてこなかったようである。

人間関係の多元化した現代社会を生きぬくために、現代人のアイデンティティは多元化しつつある。しかし、それは、個々の場面で呈示される自己像が互いに相対化されていくということでもある。人間関係が錯綜し、そこに相克状況がある場合には、相手に応じてフリッピングされる各々の自己が、互いにコンフリクトを起こしてしまうことも多い。こうして、自己の統一的なイメージはだんだんと揺らいでいく。後期近代社会における生のリアリティの希薄化は、具体的にはこのような様相を伴いつつ進行してきたのである。

-2-b 複雑性を縮減した世界

しかし、だからといって、私たちの多くは、いきなり「現実世界の殺害」によるリアリティの復活を夢想するわけではない。価値項目を選択するという行為を放棄することが、いきなり価値項目の全否定に直結するわけではない。その前に、リアリティ欠落の元凶と感受されている人間関係の多元性をまずは縮減しようと企てるはずである。それが、近年とりわけ若者の中で広まっていると指摘される人間関係の島宇宙化と呼ばれる現象である。すなわち、ごく身近な生活圏の内部で閉じられた人間関係を営み、その外部との関係性を想定しないような生き方である。

たとえば、若者たちの間で「萌え」と表現される近年の感性のあり方は、外部の文脈とは無関係に欲望対象の細部へ極端なこだわりを示すという特徴を共通にもっている。自らの欲望を社会へと接合していく回路が、ここでは放棄されている。というよりも、それはあえて削ぎ落とされている。美少女アニメに萌えを見出す視線は、「ねこみみ萌え」や「メガネっ子萌え」のように登場人物の服装の一部やアクセサリなど、あるいは「ドジっ子萌え」のようにその何気ない表情や仕草など、つねにトリビア的な要素へと向けられている。また、「メイド萌え」の若者たちが秋葉原に足繁く通うのも、メイドを演じている少女のコスチュームや言葉使いといった断片的な要素の一つ一つに萌えを感じるからである。少女の全体的な人格に恋しているわけではない。

このように、世界の細部に「萌え」の要素を感じるとる視線は、欲望の対象をひたすら微分化していく志向をもっている。萌える若者たちがきわめてトリビア的な要素にこだわるのは、それらの要素を無数に積み重ねていくことで最終的に全体像を構築できると考えているからではない。そうではなくて、全体から切り離された極小の世界の中にこそ純粋なる真正さを見出しうると感じているからである。彼らの「萌え」の対象が脱文脈的でトリビア的なものに見えるのは、私たちが社会という外部世界の立ち位置からそれらを眺めているからである。しかし、そもそも外部世界に準拠してものごとを見つめる視点を捨て去ったとき、それらは決して瑣末な要素の断片群ではなくなる。

たしかに、萌える若者たちにとって外部世界は不在である。しかし、彼らは外部世界をたんに喪失しているわ

けではない。外部世界に言及された途端に、内部世界の諸要素はたちまち相対化されてしまう。それを回避するための防衛策なのである。したがって、現代の若者たちが脱社会化した内閉的なメンタリティを示すのは、社会という大海を知らない井の中の蛙だからではない。むしろ、社会という大海の不確実性を身に染みて感じている最も先鋭的な人びとだからである。

同様の視点に立てば、島宇宙化した人間関係を生きる若者たちは、多元化した人間関係にともなう複雑性と相対性を縮減するために、外部へと接合される回路を放棄しているのだと考えられる。閉じられた関係の内部へと感覚の窓を閉じてしまうことで、自らの視線の絶対性と安定性を確保しようとしている。あらゆるものが相対化されてしまう現代社会のなかで、それでもなお生のリアリティをなんとか保持しつづけるために、外部世界をあえて積極的に遮断しているのである。「班が異なれば、県が異なるみたいだし、学級が異なれば、国が異なるみたい」というある中学生の言葉は、まさに言いえて妙であろう。

-2-c 島宇宙内部の虚偽感覚

ところが、こうして確保された島宇宙の内部が生みのリアリティにあふれる圏域となっているかといえば、決してそんなことはない。1999年の東京都青少年基本調査のデータによると、現在の若者たちは、第三者に対してはほとんど無関心でコミュニケーションを避ける傾向を強めているが、親しい間柄の人間に対しては過剰なほどの優しさを示し、相手が傷つかないように細かい気配りをしている様子が見える。

たとえば、「私立大に通うエリさん(19)の口癖は『どう思う?』。好きか嫌いかを断言しないのは当たり前。語尾に『かも』を付けてほかしても、まだ不安。みんなと違ったらどうしようか、と。……飲み会ではちゃんと、はしゃげているか、もうひとりの自分がチェックする。『気がつく、本当の自分がどこにあるのか、自分でもわからなくなりそうになる。疲れます』」と語る(「死に至る訳」『AERA』2003年8月18-25日号:10)。

ある少女の次の言葉も示唆的である(井田真木子[1998]より重引)。「言いたいことがあっても、どう言ったらいいかわからないし、わかっているのは、個人的な奥の奥まで触れられたら、あっというまに逃げてしまって、それまでの親友関係、全部壊れてしまうってことだけなんです。私たち、だいたいそうですけど。私もダメかもしれない。会ったら、『わあ、元気してる?』で、わあっとみんなで遊びに行っていて、彼氏の話とかして盛り上がり、『また会おうね』でおわり。それやらなければ、みんな逃げていっちゃうんですよ。」

また、中学生を対象とした深谷昌志[1998]の調査によれば、いつも友人と同じ行動をとり、一人だけ目立った行動をしないように心がけている生徒は、調査対象者の80パーセントに達し、「授業中、答えが分かっているけど、みんなが分からないときは分からないふりをする」生徒も、調査対象者の70パーセントを超える。NHK世論調査部[1986]による若者調査でも、「相手のプライバシーに深入りしないし、自分も深入りされたくない」と答えた者が全体の79パーセントを占め、「相手の話が面白くなくても、熱心に聞くようにしている」と答えた者も全体の78パーセントを占めている。ここにも、友人関係に異常なほど細かく気を配りあっている様子が見てとれる。

このように、島宇宙の内部では、互いの対立点が顕在化しないように高度な配慮を伴った人間関係が営まれている。あたかもガラス細工を扱うかのような繊細さで、恐る恐ると人間関係をマネジメントしている人びとにとって、互いの対立点が顕在化してしまうことは耐えがたい脅威である。そのような異常事態は何としてでも避けねばならない。ここに、対立点を顕在化させないような「優しい関係」のテクニックが、きわめて洗練された形で広がっていくことになる。断定を避ける「ほかし表現」がそうであるように、互いの対立点や相違点に眼をこらして解決をめざすというよりも、対立そのものをなかったことにしてしまう「優しさの技法」が、いろいろと編み出されているのである。

「優しい関係」の下では、対人アンテナを互いに張り巡らせ、薄氷を踏むような繊細さで相手の反応を察知しながら、同時に自分の出方を決めていかねばならない。そうすることで、相手との微妙な距離を保とうとする。ここでわずかでも読み違いをしてしまうと、「優しい関係」は容易に破綻の危機にさらされることになる。しかし、人間関係を円滑に進めようとする微妙な舵取りに没頭するあまり、コミュニケーションされているはずの肝腎の

中身はどこかへと忘れ去られてしまいかねない。コミュニケーションを繰り返すことでコミュニケーションに値する関係であることを互いに確認しようとし、コミュニケーションされる内容よりもその円滑な回路を維持することが最大の共通課題となる。「私たちって、これだけ濃密な会話をしてるのだから、きっと親友だよ」と。

こうして、島宇宙化した世界の内部でも、相手に合わせた自分を演じようとする中で、現実の人間関係を虚偽とを感じるような感覚が進行していく。島宇宙の内部では、価値項目を選択する際にコンフリクトを起こさないような他者が求められているのだから、それは、当然ながら真の意味での他者ではない。すなわち、「優しい関係」とは、ジジエクの表現を借りるなら「カフェイン抜きのコヒー」のようなものであって、そこに真の現実はない。それは、現実らしからぬ現実であり、いわば虚構化された現実である。

この点に関して、大澤[2005:105]はこう述べる。「他者は、脅威とならない限りで、予想外の攻撃性や暴力性を発揮しない限りで、つまりは他者らしくふるまわない限りで、その存在を許されているのだ。端的に言えば、この場合の他者とは、『他者(性)抜き他者』である。あるいは、こんなふうに言い換えてもよい。他者は、われわれに過度に近づかない限りで「われわれ」にとっての侵害とならないほどの距離をおいている限りで存在を許されている、と。そして、一般に、様々な事物に『現実』らしさを宿らせる要素とは、そこに孕まれている他者性(の痕跡)である。」

-3 自己肯定感の脆弱性と「自分の地獄」

-3-a 期待感と否定感の狭間

では、島宇宙化によるリアリティ回帰の期待を裏切られた人びとは、再び「現実世界の殺害」を夢見るのだろうか。しかし、現在の若者たちは、それがけっして容易な企てではないことを、オウム真理教による最終戦争の失敗という教訓からすでに学んでいる。「現実世界の殺害」が限りなく不可能に近い企てだとしたら、その欲望は、今度は自分自身へとね返ってこざるをえないだろう。この現実世界を認識し、それを感受する主体である自己の殺害をとおして、リアリティの欠落した現実世界を終結させるしか術はないからである。そして、それを可能ならしめているのが、「優しい関係」の元凶でもある自己肯定感の脆弱性である。

この点に関して、佐伯[1999]は次のように述べている。「今日においては、人々は、自分が一定の役割を果たし、社会から、あるいは仲間から何かを期待されているという実感をなかなかもたなくなっている。これは中年だけではなく、むしろ若い者にこそ顕著であろう。今日、多くの若者が、自分は社会から何かを期待されているとは感じない。その結果、自分がもはや必要とはされていないという感じ、あるいは自分は余計者だという感じ、こうした感覚が相当広く蔓延している……社会から何も期待されていない、自分の生は余計なものだという感覚からは、死の『形』も『意味』もでてこない」。

現実世界に対するリアリティの欠如とは、自らの存在理由について現実世界から何も期待されていないと感じてしまう彼ら自身のリアリティ感覚の欠如の裏返しでもある。そして、このような自己イメージを彼らが抱いてしまいやすいのは、社会からの期待感が現実には低下してきたからというよりも、むしろ彼ら自身の自己期待感への内圧が内閉的に、そして過度に高められているからではないかと思われる。香山も、「自尊感情を持たない若者が多い。劣等感が強い一方、自分は特別だという優越感もある。理想像と現実の自分の差を知ると、極端な自己否定に走り衝動的に自分を傷つける」と新聞取材に答えている(「ネットの死・上」『朝日新聞』2003年5月14日朝刊)。

彼らのいづく特別感、具体的な人間関係のなかで構築され、それ故に社会的な根拠を備えた特別感ではない。生得的に備わっている与件であるかのように、ただ内閉的に思念された特別感である[土井 2004]。だから、それは思い込みの域を脱することができず、いくら自己期待値が高まったとしても、いや、むしろその期待値が高すぎるがために、かえって自己肯定感を削いでしまう。そして、その欠落感を補うために、「優しい関係」へと依存し、自己承認を与えてくれる他者への欲求を高めていくのである。

-3-b 自己承認欲求の高まり

2004年11月、茨城県水戸市において、引きこもり状態にあった19歳の青年が、自宅内で両親を殺害する事件が起きた。そのわずか12時間後には、同じく茨城県の土浦市で、やはり引きこもり状態にあった28歳の青年が、自宅内で両親と姉を殺害する事件を起こしている。たまたま類似の事件が重なったため、現代を象徴する事件としてマスメディアでも大きく取り上げられた。

事件を起こした青年たちが引きこもり状態にあったことと、彼らの引き起こした事件との間には、もとより直接の因果関係があるわけではなからう。事件そのものはさまざまな要因がいくえにも重なって起きたもので、引きこもりが事件の原因とはいえない。むしろ自宅に引きこもっている人びとにとっては、自らの居場所を提供してくれる家族は命綱のような存在である。それを抹殺する振る舞いは、表向きの形態こそ違えども、その内実は自殺行為と同じともいえる。

これらの事件は、引きこもりであったことが引き金となったものというよりも、引きこもっていた青年たちが、自宅にさえ居場所がないと感じるまで追いつめられたときに、不幸にも暴発してしまったものと捉えるべきであろう。引きこもりを中断して社会へ出るように家族から急かされたとき、自らの命綱であるその家族を抹殺してまでも自宅に留まざるをえなかった青年たちの、社会に対する絶望感の強さを、これらの事件は物語っているように思われる。

しかし、その社会に対する絶望感とは、社会で生きていく困難の多さを嘆いたものではない。水戸市の青年は、自らの心境を綴ったウェブサイト、「自分の地獄」という言葉を残していた。犯行後の事情聴取では、「中途半端な自分がつらかった。家族から責められている気がしていた」とも供述している。ここには、なんともやるせない彼の自己肯定感の低さがストレートに表われているように思われる。

いかんともしがたい自らの「生きづらさ」を語る時、これまでよく用いられてきたレトリックは、「この世は地獄」という表現であろう。生活上の困難からくる「生きづらさ」についてだけでなく、人間関係に由来する「生きづらさ」についても、このレトリックは頻繁に用いられてきた。しかし、この世界の有り様のほうを地獄だと嘆くとき、そこに渦巻いていたのは世界に対する不満であり、自分そのものに対する不安ではなかった。そこには、明確な不幸や苦難といったこの世のリアリティの過剰な重さがあったからである。

それに対して、「自分の地獄」という言葉には、この世のリアリティの重さがほとんど感じられない。むしろ、自分という存在そのものを地獄の源泉と捉える表現である。そこには、自分に究極の価値を求めようとしているのに、しかしその自分を肯定的に評価できないという悶々とした「生きづらさ」が感じられる。彼らは、たんに自己否定的なのではない。自らを地獄の源泉とみなすに至る心境の背後には、自分自身に積極的な価値をなんとか見出したいにもかかわらず、しかしそうしようとすればするほど、かえって逆に不安感が募っていつてしまう、そんな自らの存在感の不確かさがある。すなわち、そこには、自己特別感の高さと自己肯定感の低さが同居しているのである。

一方、土浦市の青年は、犯行後の事情聴取で、「自分が殺される前に親を殺そうと思った」と供述している。しかし、現実には親が殺意を抱いた形跡などないから、「自分が殺される」というこの表現は、自分という存在が全否定されることを危惧したメタファーであろう。その裏には、自分に対する強い不安が潜んでいる。彼は、「自分の居場所が奪われる」とも述べていたように、自らの存在の脆弱さにおののいていたようである。

一般に、引きこもりの青年には自責の念が強いといわれる。たしかに、社会に参加したいのにできない自分を顧みるとき、「このままではいけない」「自分は駄目な人間」といった想いを抱きやすいのは事実だろう。しかし、このような自己肯定感の脆弱さは、なにも引きこもりの青年に特有のものではない。近年の若者に共通して見受けられる傾向である。だから、彼らは「優しい関係」の維持に躍起となるのだし、他者からの自己承認を得ることなくして、不安定な自分を支えきれないと強く感じているのである。

相手の期待に対して過敏に反応し、それに何とか応えようとするのは、そうすることで自分を承認してもらい

たいという欲求が強いからである。何度もリストカットを繰り返していたある少女は、「周りに対して迷惑をかけるのが申し訳ない、でも、そういう周囲の思いを押し付けられるのもつらい」と語っていた。周囲に迷惑をかけたくないという彼女の配慮は、おそらく自分がつねに「良い人」と見られていたいという気持ちの強さの裏返しなのであろう。

-3-c 純粋さへの期待の高さ

このように眺めてくると、現在の若者たちの人間関係に対する虚偽感覚の高まりは、彼らのコミュニケーションの能力が劣ってきた結果ではなくて、むしろコミュニケーションの成果に対する期待値のほうが上昇した結果だといえる。換言すれば、彼らの人間関係の実態が不純なものへと変質してきた結果ではなくて、むしろ「純粋な関係」への欲求水準のほうが高まってきた結果だといえる。だから、現実世界の人間関係をリアリティの欠けたものと感受してしまうのである。

最近の中学生の様子について、河上亮一[1999:16]は、「ふだんクラスのなかでは、和気あいあいとしているように見えるのだが、生徒一人ひとりに話を聞いたり、よく観察してみると、自分のまわりにバリアーをつくって、そのなかにはお互いに入らないようにしているようだ。……以前は、生徒同士が大声で怒鳴りあってケンカをすとか、取っ組み合いをするということがよくあったが、最近はそういうことがひじょうに少なくなった」と述べている。このような状況に対して、若者の人間関係が希薄化していると嘆く人びとは多い。しかし、このような傾向は、彼らの洗練されたコミュニケーション能力の賜物ともいえる。彼らは、不安定な人間関係のなかで円滑な日常生活を営むために、あえてその関係を希薄化させるテクニックを駆使しているのである。

「本当の家族が欲しい」という遺書を残してネット集団自殺を試み、未遂に終わったある女性は、「人の心がわからないし、すごく怖いんです。だからもう家族には何も求めません。どうせ、みんな本音でなんて話していないし、家族なんて何のためにあるんだろう、って私はいつも思うんです」と語っている（渋井[2004:18-22]より重引）。しかし、そう嘆きつつも、彼女はけっして家を捨てようとはしなかった。それは、この虚偽感覚が、関係性に対する彼女の期待値の高さの裏返しであることを示唆しているように思われる。実際、彼女は次のようにも語っているのである。「本当は父親も母親も信じたい。信じられない気持ちと、信じたい気持ちの間で揺れ動いているんです」と。

・虚構による現実のレイヤー化

-a ネットを織り込んだ現実

では、「限りなき日常を生きる」（宮台真司）という閉塞的な現実世界から抜け出せないなかで、生のリアリティ回復への糸口をなかなか見出せないまま、ネット集団自殺は今後もますます増えていくのだろうか。そうは思われぬ。なぜなら、ネットをめぐるリアリティのほうが大きく変貌しはじめているからである。

これまでは、ネット空間を構築するITの草創期であったために、現実世界とネット世界との間にはかなり明確な境界線が存在していた。だからこそ、リアルな世界とヴァーチャルな世界という両者の対比的な考察も可能であった。しかし、今日の若者たちの間で進行しつつあるのは、むしろ両者の融合という事態である。

たとえば、浅野[2005 13]が指摘するように、現実世界における「身近な他者との関係はブログを介することによって重層化し、ますます濃密なものとなっていく。すなわち、他者がブログを読んでいることを前提に交流がなされ、その交流の中から生じたいくつかのエピソードが再びブログで取り上げられ、それがまた次の交流の前提となり...といったようにである。」

この傾向を考える上で、次のエピソードはきわめて示唆的である。「350年後、内線とモンスターに脅かされる地球に似た星。そこで巡り合った怪力の巨人と魔法使いの妖精。冒険を続けるうち、2人は愛し合い、結ばれ

た。話の前半はオンラインゲーム「エターナルカオス」の世界。後半は大阪市の会社員、西口雅也さんと妻真純さんとの、現実の話。2人はこのゲームで知り合い、今年2月に結婚した」（『朝日新聞』2006年6月11日朝刊）。

ネットにおける人間関係は、現実世界におけるそれと別次元に成立する比重を低め、むしろ後者に組み込まれる形で両者の融合が始まっている。言い換えれば、現実世界における人間関係の多元化とレイヤー化をさらに進める方向で、ネットが機能しはじめている。現実世界における相互作用のチャンネルの一つとして、ネットという装置が使用される頻度が急速に高まっているのである。

-b 属性を共有しない親密性

以上のことは、ネットが「純粋な関係」の構築に適合した空間として看做されがたくなってきたことを意味している。むしろ、現実世界における人間関係の虚偽性を強めるものとして、それが感受されるようになってきたことを意味している。そして、その傾向をさらに加速させているのが、とりわけ若年層の間に強まっている親密な関係に対する感受性の変質である。

辻らが2001年に行なった全国調査によれば、「親友とはお互い性格の裏の裏まで知っている」と「友人の職業や所属は必ず知っておきたい」という質問項目の間には、年齢差による明確な相違が見受けられる。50代以上の年齢層では、両者の間に正の相関が見られるのに対して、20代～40代の層では、両者の間に有意な相関が見られないのである。この点について、辻[2006:5-6]は、「年配層では、相手の内面・性格を知っていることと、相手の社会属性を知っていることが連動する（ある程度、一つの軸でとらえられる）のに対し、若年層では連動しない（それらを別の軸でとらえなくてはならない）」と解釈している。

このように、日常生活においてある特定の他者に親密な感情を抱くことと、その他者の社会的属性をよく知っていることとは、かつてのように相関しなくなっている。互いの社会的属性をあまり詳しくは知らなくても、両者の間に親密な関係が成立しやすくなっているのだ。このような感受性の変質が、現実世界へのネット世界の繰り込みを促進しているのは確かであろう。

-c 虚構による現実の虚偽化

リストカット少女たちが自らの気持ちを綴るネット掲示板やブログでは、いわゆる「自罰傾向」を示す語りが多くなってきているといわれる。それは、彼女たちの自己肯定感の低さを投影したものであると同時に、そのような書き込みしか許されないと感じてしまう彼女たちのマナー意識の産物でもある。「自分がリストカットを繰り返すのは、周囲の誰が悪いわけでもなく、自分が至らないからだ」と、彼女たちが語らざるをえないのは、「優しい関係」を営んでいく上で、それが相互に期待される語りであることを熟知しているからである。他者に原因があるかのような語りは、その他者の事情に介入することになり、そこに迷惑や負担が生じてしまいかねない。これは、「優しい関係」のマナーに抵触する行為となってしまう。

彼女たちは、自らのリストカットの理由が「優しい関係」の困難にあることを熟知している。だから、さらにその関係規範に抵触することを好まない。あくまで自分に非があるとする彼女たちの語り口は、誰かを非難する書き込みをすることで、ひょっとして自分も攻撃を受けるかもしれないからというより、むしろもうこれ以上は関係規範の侵犯者となりたくないという切なる想いの現われであり、それを示すための儀礼的行為なのである。たとえいかなる場合でも、他者を傷つけないように配慮しあうことが、「優しい関係」の信奉者に要請される最優先のルールであり、それを厳守することこそが我が身を守る最善の策だと信じているからである。

以上のように、現実世界における「優しい関係」が、いまやネット上でも強く要請されるようになってきている。「虚偽化された現実」から「より現実らしい現実」へと逃避する手段としては、ネットはもはや有効な装置として機能しなくなっているのである。コミュニケーション・チャンネルの多層化を容易ならしめることによって、むしろ現実の虚構性をさらに高める装置として機能しつつあるとすらいえよう。

このような事態が進行するなかで、生のリアリティの回復を目指す人びとが、ネット集団自殺という手段を積極的に採用する根拠は薄まってきている。したがって、今後、ネット集団自殺が減少していったとしても、それは、現代を生きる人びとの抱え込んだ問題が解決されたからではない。そうではなくて、問題を解決する手段として、ネットが有効であるとは認識されなくなっただけである。生のリアリティの空白という後期近代社会に特有の「生きづらさ」は、その具体的な反照の形態を変えつつも、さまざまな局面でさらに漏出しつづけていくことであろう。

文献

- 浅野智彦 2005 「即自的コミュニケーションへと変化する『表現』」 『月刊少年育成』12月号，大阪少年補導協会
- 浅野智彦編 2006 『検証・若者の変貌 - 失われた10年の後に - 』勁草書房
- 池田清彦 2003 「身内と赤の他人、逆転の果てに - 『ネットで心中』事件に思う - 」 『朝日新聞』4月21日夕刊
- 井田真木子 1998 『十四歳』講談社
- NHK世論調査部 1986 『日本の若者』日本放送出版協会
- 大澤真幸 1996 『虚構の時代の果て - オウムと世界最終戦争 - 』筑摩書房（ちくま新書）
- 2005 「不可能性の時代 - 戦後史の第三局面 - 」 『世界』1月号，岩波書店
- 2006 「政治的思想空間の現在 前篇 相互依存する他文化主義と原理主義 」 『世界』2月号，岩波書店
- 河上亮一 1999 『学校崩壊』草思社
- 斎藤環 2003 「『生』き希薄さ、根底に」 『朝日新聞』2003年5月2日朝刊
- 佐伯啓思 1999 「高自殺の時代 - 社会の期待感が消失 - 」 『読売新聞』8月5日夕刊
- 渋井哲也 2004 『ネット心中』日本放送出版協会（生活人新書）
- 芹沢俊介 2003 「ネット心中を考える - 孤独なまま死を願う人々 - 」 『読売新聞』7月1日夕刊
- 辻大介 1999 「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」 『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版
- 2006 「『失われた10年の後に』に向けて」 青少年研究会（6月24日）配布資料
- 土井隆義 2004 『「個性」を煽られる子どもたち - 親密圏の変容を考える - 』岩波書店（岩波ブックレット）
- 深谷昌志 1998 「閉じ込められ疲れている中学生」 『論座』37号，朝日新聞社
- 山崎正和 1987 『柔らかな個人主義の誕生』中央公論社（中公文庫）